



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

知的障害者の道具操作における観察学習：
最終状態の安楽効果に着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 優貴乃, 平田, 正吾, 奥住, 秀之, 澤, 隆史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166814

知的障害者の道具操作における観察学習

—— 最終状態の安楽効果に着目して ——

菊池 優貴乃*¹・平田 正吾*²・奥住 秀之*³・澤 隆史*³

発達障害学分野

(2020年9月29日受理)

1. はじめに

私達は日々、多様な道具を手に取り、それらを様々な扱いつつ生活している。道具をまず把持する際に、取りうる方法は無数にあるにも関わらず、特定の道具に対しては個人間である程度共通した方法が認められる。こうした運動の多様性を制約する原理、あるいは運動の定型性を生じさせる原理の一つとして、「最終状態の安楽効果」(end-state comfort effect, ESC効果, Rosenbaum, 2010)がある。ESC効果とは、ある運動を遂行する際には、次の運動へと移行しやすい安楽な姿勢で、その運動が終了するようあらかじめ計画が成されるという現象を指す。例えば、開口部が下に伏せられているコップに水を注ぐ際には、親指を上に向けた状態でコップをまず掴む方が安楽であるにも関わらず、私たちは腕を捻って親指を下に向けた状態で、まずコップを掴むことが多い。これはコップを掴んだ後に水を注ぐ際に、そちらの方が安定かつ安楽な状態(親指を上にした姿勢)で、最終的にコップを持つことになるからである。このように最終的な状態が安楽となるよう、あえて安楽でない姿勢から運動が開始された場合、ESC効果の現れと解釈する。ESC効果は私達の運動や道具操作において頻繁に生じており、運動の定型性を規定している。だが、このESC効果は必ずしも発達初期から著明に認められるわけではなく、定型小児が成人と同様にESC効果を優勢に示すようになるのは、概ね10歳頃からとされている(Wunsch *et al.*, 2013)。だが、非定型発達の者達におけるESC効果の実態については、これまであまり検討されてい

ない。

これを踏まえ菊池(2018)は、知的障害者におけるESC効果の実態について、Cup manipulation task (Weiss, Wark, & Rosenbaum, 2007; Wunsch *et al.*, 2015. 菊池ら, 2019. くじら課題. 図1)を実施することから検討した。Cup manipulation taskは、定型発達児を対象としたいくつかの先行研究でこれまでに実施されており、対象者は装置に設置された容器を取り出し、その開口部を上向きにした後に、中の人形を取り出すよう求められる。この際に、はじめに容器をどのように取り出すのか評価することから、ESC効果の出現が検討される。知的障害者に対する測定の結果、ESC効果を優勢に示す者は少ないことが明らかとなった。だが、この課題では、容器の開口部を上向きにしなくとも課題を終了する(人形を取り出す)ことが可能であることから、ESC効果が生じる必然性が低く、これが結果に影響を及ぼしている可能性を否定できないことも問題点として見出された。これを踏まえ、菊池(2020)では容器の開口部を上向きにしなければ目的を達成することができないcup manipulation task(色課題)を考案して測定を行ったが、こうした場合にも知的障害者におけるESC効果の出現は稀であることが明らかとなった。

このようなことがこれまでに明らかとなっているのであるが、それでは課題をどのように行うべきか事前に示した場合、知的障害者におけるESC効果の出現にどのような変化が生じるのだろうか。これまでESC効果の出現を見るための課題において、当然のことではあるが対象者がどのように課題を行うべきか予め指示している研究は、ほとんど存在しない。だが、ESC

*1 茨城県立内原特別支援学校 (319-0323 茨城県水戸市鯉淵町 2570)

*2 千葉大学 教育学部 (263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33)

*3 東京学芸大学 特別支援科学講座 発達障害学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1)

効果が出現していない者達に対して、その出現を促す手立てを考えるとという観点からは、こうした課題遂行の方法のモデルを直接的に呈示することの影響、すなわち知的障害者の道具操作における観察学習の実態を調べることは有益であろう。本研究では、この点について試行的に検討する。

2. 方法

2. 1 対象者

2つの福祉支援施設の利用者59名に対して、測定を行った。その結果、42名(女性14名)の知的障害者から以降の手続きにしたがい、測定値を得ることができた。対象者の暦年齢は、 39 ± 11 歳である。また、対象者の内、3名が自閉症を、5名がダウン症を有していた。対象者42名の内、23名の知能指数の値を知ることができた。その値は 31.4 ± 10 である。本研究では知的機能の簡易的な指標として、よく知られた絵画語彙発達検査(PVTR、上野・名越・小貫、2008)の得点を用いた。その得点に基づく語彙年齢は、 83.3 ± 35.9 ヵ月である。対象者への測定参加に関する同意は、各施設から得ている。対象者に測定への参加は義務づけておらず、事前に測定の趣旨を説明した上で、測定への参加を好意的かつ自発的に了承した者のみに測定を行った。

2. 2 課題

1) くじら課題(菊池、2020)

本課題は、漏斗状の容器及びその容器を収める装置から構成される(図1)。漏斗状の容器の口径は15cmであり、その深さは10cmであり、容器の底部から直径1.5cm、長さ16cmの木製の円柱が柄として付けられている。容器の内側の底にはマジックテープが貼られている。容器を収める装置は、縦22.5cm横20cm高さ45.5cmである。また、容器内部には高さ12.5cmの位置に水平に板を設置し、容器の開口部を伏せた状態で設置できるようにした。装置の中央部分には、漏斗状の容器の柄の安定を図るために1.8cm幅に間をあけた木製の突起を取り付けた。

測定において、対象者は着席した状態で両手を机の上に置くよう求められ、その後実験者によって対象者が上半身を大きく屈曲させることなく、装置から漏斗状の容器を片手で取ることができるよう椅子の位置を調整する。対象者はまず漏斗状の容器に収める布製の人形(本研究では7cm程度の大きさのくじらを使用した。また、その底部にはマジックテープが付けられている)を実験者から渡され、渡されたものが何であるのか答えるよう求められる。ここで「くじら」や「人形」などと正しく答えられなかった場合は、正答を示した。その後、課題で扱う道具に慣れさせるため、対象者は漏斗状の容器を渡され、柄を片手で握った上で容器の中に人形を入れるよう求められる。対象者が人

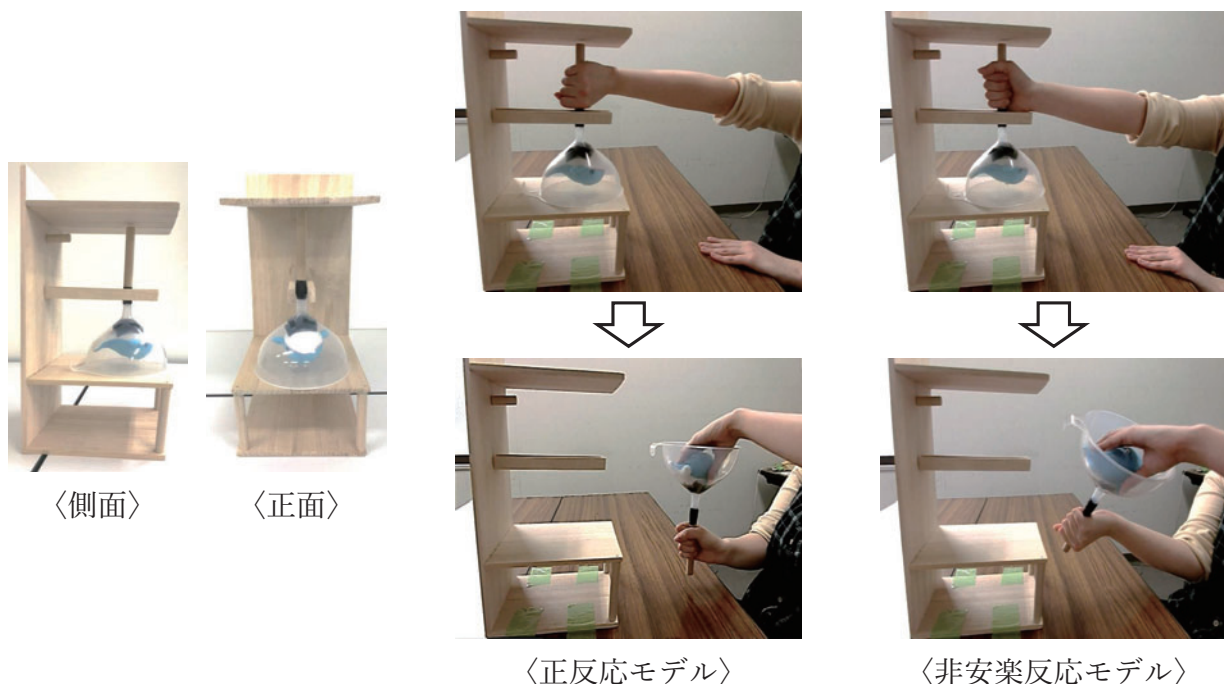


図1 くじら課題 (ESC条件)

形を容器に入れ、両者のマジックテープが付いたことを確認した後は、人形を容器から取り出すよう求める。こうした容器に対する人形の出し入れを、3～5回繰り返させた後に、本試行を行った。なお、この際の実験者は容器の柄を握ることはなく、常に容器本体を持って対象者に示している。

先行研究 (Wunsch *et al.*, 2015) にしたがって本試行では、容器の開口部が上を向いた状態で装置に設置され対象者に提示される「統制条件」と、容器の開口部が下を向いた状態で設置されて提示される「ESC条件」(図1)の2つを設け、各条件をそれぞれ4試行実施した。各条件において対象者は、容器を装置から片手で取り外したのちに、容器の開口部を上向きにした上で、容器の中から人形を取り出すことが求められる。いずれの条件でも、課題の終了時に容器の柄を握る手の親指が上側に来ている状態を、安楽な状態で運動を終了したと見なす。統制条件においてこの状態で運動を終了するには、対象者は容器の柄を手の親指を上に向けた状態で握り、装置から引き抜いた後は容器を回転させることなく、人形を反対の手で取る必要がある。一方、ESC条件では、対象者は容器の柄を手の親指を下に向けた状態で握り、装置から引き抜いた後は容器を約180度回外方向に回転させる必要がある。いずれの条件においても、対象者が容器から人形を取り実験者に差し出した際に、安楽な状態で容器を把持している場合を「正反応」とし、その値の取りうる範囲は0～4回である。また、本研究では、容器の開口部が上向きとはなっているが、柄を持つ手の親指が下向きで課題を終了している場合、それを「非安楽反応」として、この反応が生じた回数についても分析した。

本試行では以下の手続きで、課題遂行の方法についてのモデルを対象者に直接的に呈示した。まず、全ての対象者は、統制条件に関してのモデルを示される。すなわち、実験者は人形が入られた状態の容器を開口部が上の状態で装置に設置した上で、容器の柄の部分から自らの利き手の親指が上の状態で握り、装置から引き抜いた後、反対の手で人形を取る。その後「このように取って、人形を私に渡してください」「道具のこちら側(開口部を指さしつつ)が、上に来るように取ってください」と、対象者に教示する。続いて、実験者は対象者にESC条件に関してのモデルを示すが、本研究では正反応モデルが示される者達(「正反応モデル群」)か、非安楽反応モデルが示される者達(「非安楽反応モデル群」)のいずれかに、対象者を無作為に割り当てた。正反応モデル群では、実験者が容器を開口部が下の状態で装置に設置した上で、容器の柄を

自らの利き手の親指を下に向けた状態で握り(図1)、装置から引き抜いた後に容器を180度回外方向に回転させる。その後、反対の手で人形を取り、「このように取って人形を渡してください」「道具のこちら側(開口部)が、上に来るように取ってください」と、対象者に教示する。この場合、実験者は最終的に安楽な状態で課題を終了することとなる。一方、非安楽反応モデル群では、実験者が容器を開口部が下の状態で装置に設置した上で、容器の柄を自らの利き手の親指を上に向けた状態で握り(図1)、装置から引き抜いた後に容器を180度回外方向に回転させる。その後、反対の手で人形を取り、「このように取って人形を渡してください」「道具のこちら側(開口部)が、上に来るように取ってください」と、対象者に教示する。この場合、実験者は最終的に非安楽な状態で課題を終了することとなる。こうした実験者によるモデル呈示を行った後に、対象者に対して統制条件4施行及びESC条件4施行が実施された。先行研究 (Wunsch *et al.*, 2015) にしたがって、統制条件を2試行行った後にESC条件を2試行を行うことを繰り返すものと、ESC条件を2試行行った後に統制条件を2試行を行うことを繰り返すものの2つの実施順を設け、対象者をそのいずれかに無作為に割り当てた。また、いずれの群に関しても、容器の柄を片手で握ること、容器を持った後は持ち替えてはならないことを教示した。本研究では、対象者が課題で使用する手を教示により指示することはなかった。ただし、各条件において容器の柄を握ろうとしない場合は実験者が指さして柄を示した。また、課題遂行中に柄を持ち替えた場合や、ESC条件において容器を回転させずに人形を下から取った場合には、その条件の終了後にそれらの反応は禁止されている旨を伝え、再度教示を行った。また、実験者がモデルを呈示している際に、それを注視することができない対象者は、分析対象から除外した。なお、モデル呈示以降の本施行は、実験者は容器の柄を握ることはなく、常に容器本体を持って操作している。

全8条件の測定を終了した後は「即時モデル」として、実験者が正反応モデルを対象者に示した後に、ESC条件を1試行を行い、その際の反応を記録した。

課題の遂行様相は、ハイスピードカメラ(CASIO製 EX100-PRO)を用いて毎秒120コマで撮影した。カメラは対象者が容器の柄をどのように握った後に、人形を取り出し実験者に渡したか、どのような手の状態で運動を終了したかという一連の様子の記録ができるよう撮影距離や角度を個別に調整した。撮影された画像をもとに、対象者が各条件において教示通りに課題

を遂行できているか（柄を片手で握っていたか、また握る手を持ち替えなかったか、容器から人形を取り出していたか）という点や、運動終了時の状態、すなわち正反応や非安楽反応の出現について分析した。

2) 色課題 (菊池, 2020)

本課題で使用している装置は、対象者と装置の間にカードが貼られていることと、漏斗状の容器に黒い覆いがしてあることを除けば、くじら課題で使用しているものと同一である（図2）。漏斗状の容器に覆いをつけたのは、容器の底部に貼られているチップの色を、対象者が容器を覗き込まなければ分からないようにするためである。

対象者はまず本試行の前に、底部に赤または青色のチップが貼られた漏斗状の容器を示され、貼られたチップと同じ色を、装置の前に貼られたカードの中から指さすよう求められる。この手続きは、いずれの色に関しても行い、正しい反応が得られなかった場合は、分析対象から除外した。

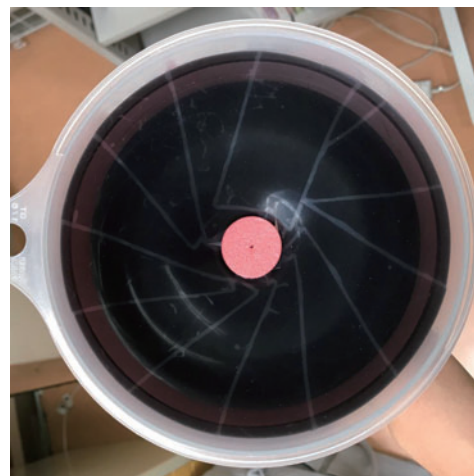
色課題でも本試行ではくじら課題と同様に、容器の開口部が上を向いた状態で装置に設置され対象者に提示される「統制条件」と、容器の開口部が下を向いた状態で設置されて提示される「ESC条件」の2つを設け、各条件をそれぞれ4試行実施した。いずれの条件でも、対象者に求められることは、容器を装置から片手で取り外したのちに、容器の開口部を上向きにした上で、容器の底部に貼られたチップの色を確認するこ

とである。また、課題の終了時に容器の柄を握る手の親指が上側に来ている状態を、安楽な状態で運動を終了した正反応（0～4回）と、ここでも定義し、その回数を分析した。加えて、非安楽反応の回数についても、分析を行った。

本試行では以下の手続きで、課題遂行の方法についてのモデルを対象者に直接的に呈示した。まず、全ての対象者は、統制条件に関してのモデルを示される。すなわち、実験者は開口部が上の状態で容器を装置に設置した上で、容器の柄の部分から自らの利き手の親指が上の状態で握り、装置から引き抜いた後、容器を覗き込んで色を確認した後に、装置の前のカード上の対応する色を反対の手で指さす。その後、「このように取って、色を見てください」「道具のこちら側（開口部を指さしつつ）が、上に来るように取ってください」と、対象者に教示する。続いて、対象者はESC条件に関してのモデルを示されるが、くじら課題と同様に、対象者は「正反応モデル群」か「非安楽反応モデル群」のいずれかに無作為に割り当てられる。実験者によるモデル呈示が行われた後に、統制条件4施行及びESC条件4施行が実施された。試行の実施順序等は、くじら課題と同様である。また、その他の教示や対象者の反応の記録方法も、くじら課題と同様である。また、色課題でも全8条件の測定を終了した後には「即時モデル」として、実験者が正反応モデルを対象者に示した後に、ESC条件を1試行を行い、その際の反応を記録した。



〈統制条件〉



〈容器の底部：赤チップ〉

図2 色課題

くじら課題と色課題のどちらを先に実施するかは、対象者を無作為に割り当てた。ただし、いずれの課題でも、はじめの課題で正反応モデル群に割り当てられた者は続く課題でも正反応モデル群に、はじめの課題で非安楽反応モデル群に割り当てられた者は続く課題でも非安楽反応モデル群に割り当てられた。

3. 結果

各課題の統制条件で正反応が3回未満であった場合、課題で求められていることへの理解が不十分であるとして、本研究では以降の分析から除外した。最終的に、ESC条件における「正反応モデル群」は15名、「非安楽反応モデル群」は15名となった。これら2群の暦年齢（正反応モデル群 40 ± 12 歳、対非安楽反応モデル群 40 ± 12 歳、 $t(28) = 1.17, p = .25$ ）、及びPVTR得点（ 36.5 ± 21.5 点、対 43.5 ± 26.2 点、 $t(28) = -0.79, p = .43$ ）に、5%水準で有意差は認められなかった。また、各群における自閉症者（各1名）とダウン症者（各2名）の数に、違いはない。

1) くじら課題

表1は、くじら課題のESC条件における各群の正反応数の分布を示したものである。各群における正反応数の分布に違いが認められるか、Man-WhitneyのU検定を行ったところ、その結果は5%水準で有意でなかった（ $U=100, p > .05$ ）。また表2は、くじら課題のESC条件における各群の非安楽反応数の分布を示したものである。各群における非安楽反応数の分布に違いが認められるか、Man-WhitneyのU検定を行ったところ、その結果は5%水準で有意でなかった（ $U=106, p > .05$ ）。

表1 くじら課題のESC条件における正反応数（人数）

	くじら課題ESC条件					計
	0回	1回	2回	3回	4回	
正反応モデル群	6	4◆	0	1	4	15
非安楽反応モデル群	9◆	1	0	0	5	15

注：◆は、正反応数の中央値を示している。

表2 くじら課題のESC条件における非安楽反応数（人数）

	くじら課題ESC条件					計
	0回	1回	2回	3回	4回	
正反応モデル群	8◆	3	1	3	0	15
非安楽反応モデル群	8◆	3	0	1	3	15

注：◆は、非安楽反応数の中央値を示している

続いて表3は、くじら課題のESC条件と即時モデル呈示時における正反応出現の有無を、正反応モデル群と非安楽反応モデル群を1群とした上で示したものである。くじら課題ESC条件で正反応がまったく出現しなかった15名の内、即時モデルが呈示された後に、正反応が新たに出現した者は4名のみであった。

表3 くじら課題における即時モデルの影響（人数）

	くじら課題ESC条件		計
	正反応出現 (1回以上)	正反応未出現 (0回)	
即時モデル 正反応出現	10	4	14
正反応未出現	5	11	16
計	15	15	

2) 色課題

表4は、色課題のESC条件における各群の正反応数の分布を示したものである。各群における正反応数の分布に違いが認められるか、Man-WhitneyのU検定を行ったところ、その結果は5%水準で有意でなかった（ $U=110, p > .05$ ）。また表5は、色課題のESC条件における各群の非安楽反応数の分布を示したものである。各群における非安楽反応数の分布に違いが認められるか、Man-WhitneyのU検定を行ったところ、その結果は5%水準で有意でなかった（ $U=87.5, p > .05$ ）。

表4 色課題のESC条件における正反応数（人数）

	色課題ESC条件					計
	0回	1回	2回	3回	4回	
正反応モデル群	8◆	3	2	0	2	15
非安楽反応モデル群	10◆	0	0	0	5	15

注：◆は、正反応数の中央値を示している。

表5 色課題のESC条件における非安楽反応数（人数）

	色課題ESC条件					計
	0回	1回	2回	3回	4回	
正反応モデル群	8◆	1	1	3	2	15
非安楽反応モデル群	6	1	1◆	1	6	15

注：◆は、非安楽反応数の中央値を示している。

続いて表6は、色課題のESC条件と即時モデル呈示時における正反応出現の有無を、正反応モデル群と非安楽反応モデル群を1群とした上で示したものである。色課題ESC条件で正反応がまったく出現しなかった18名の内、即時モデルが呈示された後に、正反応が新たに出現した者は1名のみであった。

表6 色課題における即時モデルの影響 (人数)

	色課題ESC条件		計
	正反応出現 (1回以上)	正反応未出現 (0回)	
即時モデル 正反応出現	11	1	12
正反応未出現	1	17	18
計	12	18	

4. 考察

本研究では、知的障害者の道具操作における観察学習の実態について、ESC効果の出現に着目して検討した。測定の結果、くじら課題と色課題のどちらに関しても、正反応モデル群と非安楽反応モデル群における正反応数の分布は変わらないことが明らかとなった。この結果は、知的障害者におけるESC効果の出現に、事前のモデル呈示が明らかな影響を及ぼしておらず、観察による学習効果が認められないことを意味している。また、この結果は、一連の先行研究(菊池, 2018; 菊池, 2020)で指摘されている知的障害者におけるESC効果の未出現が、対象者が教示を理解できなかった可能性のみに還元されえないことを、同時に示している。知的障害者に対するモデル呈示が、ESC効果の出現に強い影響を及ぼしていないことは、正反応モデルを示した後に、即座に課題遂行を求める即時モデルにおいても、正反応を新たに示す者が少数であったことから裏付けられる。菊池(2020)は、知的障害者のくじら課題や色課題における、非安楽反応などの正反応ではない様々な反応の共通点として、「呈示された対象物をまず掴む」という習慣的な反応を抑制できない点が挙げられることを指摘している。本研究の結果は、知的障害者におけるこうした習慣的な反応が、具体的なモデルを事前に呈示されることによっても抑制されないことを示すものである。この点に関して、Jovanovic & Schwarzer (2011)は、18ヵ月から24ヵ月の定型小児においても、成人のモデルを観察することではESC効果の出現が促されないことを報告している。定型小児において、いつ頃から観察学習によるESC効果の出現が成立するのか、またそれはどのような能力の変化によるものなのか、今後検討していく必要がある。ただし、Jovanovic & Schwarzer (2011)では、成人のモデルを観察することで、定型小児においては課題の目的の理解は促されたことが報告されている。同様の事態は、知的障害者においても当てはまるかもしれない。知的障害者の道具操作における観察学

習の実態について、ESC効果の出現のみに留まらず、より広い観点から検討する必要がある。

こうした結果を踏まえた上で、知的障害者においてESC効果の出現を促すには、どのような方法が考えられるだろうか。菊池ら(2019)は、水を入れるために伏せられたコップを手にとるという、本研究におけるESC条件と要求される動作はほとんど同様でありながら課題の目的がより具体的となった状況では、知的障害者におけるESC効果の出現が促されることを見出している。こうした具体的な状況と、直接的なモデルを事前に呈示することの心理学的性質の違いを、より整理していくことにより、知的障害者の道具操作に対する重要な支援原則が得られることが期待される。

本研究においては、最終的に非安楽な状態となる方法で課題を遂行する方法を事前に呈示する群を設けたが、この群において非安楽反応が多く現れるという結果は認められなかった。一方、定型小児においては、道具が非効率な方法で使用される場面を観察した後は、自らもその方法を模倣する傾向があることが指摘されている(模倣学習: トマセロ, 2006; 抗アフォーダンス模倣: 大藪, 2020)。定型発達児・者に対しても本研究と同様の測定を行い、知的障害者における結果との異同を検討する必要がある。

付記

本論文は、東京学芸大学大学院教育学研究科に提出された修士論文(知的障害児・者の運動プランニングについての多面的分析. 菊池優貴乃)で使用したデータの一部に関して、新たな分析を行ったものである。また、本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C), 課題番号17K01628)による助成を受けた。

文献

- Jovanovic, B. & Schwarzer, G. (2011). Learning to grasp efficiently: The development of motor planning and the role of observational learning. *Vision Research*, 51, 945-954.
- 菊池優貴乃. (2018). 知的障害者の運動プランニングの特徴について～End-state comfort effectに注目して～. 茨城キリスト教大学文学部卒業論文.
- 菊池優貴乃. (2020). 知的障害児・者の運動プランニングについての多面的分析. 東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文.
- 菊池優貴乃・平田正吾・内田早紀・奥住秀之・国分充. (2019).

- 知的障害における運動プランニングの特徴：課題の具体性がEnd-state comfort effectに及ぼす影響. *東京学芸大学紀要. 総合教育科学系*, 70 (1), 399-407.
- 大藪泰. (2020). 共同注意の発達～情動・認知・関係～. 新曜社.
- Rosenbaum, D. A. (2010). *Human Motor Control* 2nd ed. Elsevier.
- トマセロ, M. (2006). 心とことばの起源を探る～文化と認知～ (大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓. (訳)). 勁草書房.
- 上野一彦・名超斉子・小貫悟. (2008). 絵画語い発達検査, 日本文化科学社.
- Weiss, D. J., Wark, J., & Rosenbaum, D. A. (2007). Monkey see, monkey plan, monkey do: The end-state comfort effect in cottontop tamarins (*Saguinus oedipus*). *Psychological Science*, 18, 1063-1068.
- Wunsch, K., Henning, A., Aschersleben, G., & Weigelt, M. (2013). A systematic review of the end-state comfort effect in normally developing children and in children with developmental disorders. *Journal of Motor Learning & Development*, 1, 59-76.
- Wunsch, K., Weiss, D. J., Schack, T., & Weigelt, M. (2015). Second-order motor planning in children: insights from a cup-manipulation task. *Psychological Research*, 79, 669-677.

知的障害者の道具操作における観察学習

—— 最終状態の安楽効果に着目して ——

The Role of Observational Learning on Tool-use in Adults with Intellectual Disabilities:

Focusing on the End-state Comfort (ESC) Effect.

菊池 優貴乃^{*1}・平田 正吾^{*2}・奥住 秀之^{*3}・澤 隆史^{*3}

KIKUCHI Yukino, HIRATA Shogo, OKUZUMI Hideyuki and SAWA Takashi

発達障害学分野

Abstract

This study was aimed to investigate the role of observational learning on tool-use in adults with intellectual disabilities (ID). The end-state comfort effect of tool-use was analyzed. Participants were 42 adults (39 ± 11 years) with ID free from severe sensory and motor problems. The end-state comfort effect was assessed using two types of cup manipulation tasks. Results did not indicate a significant observational learning effect on the tool-use of adults with ID. The psychological characteristics of the tool-use of adults with ID were discussed.

Keywords: tool-use, end-state comfort effect, observational learning

Department of Developmental Disabilities, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、知的障害者の道具操作における観察学習の役割について検討することである。道具操作における最終状態の安楽効果について、分析を行った。対象者は、感覚障害や運動障害のない知的障害者42名(39±11歳)である。最終状態の安楽効果は、2種類のcup manipulation taskを用いて評価した。測定の結果は、知的障害者の道具操作における明らかな観察学習の効果を示すものではなかった。知的障害者における道具操作の心理学的性質について、考察した。

キーワード: 道具操作, 最終状態の安楽効果, 観察学習

*1 Uchihara Special-needs school (2570 Koibuchi-cho, Mito-shi, Ibaraki, 319-0323, Japan)

*2 Chiba University (1-33 Yayoi-cho, Chiba-shi, Chiba, 263-8522, Japan)

*3 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)